

竹取物語の作意と主題

一 『竹取物語』主題論の課題

『竹取物語』の主題論が困難なのは、全体が、写實的・諷刺的な求婚譚部分とそれを除いた空想的・浪漫的な冒頭・末尾の部分とに分かれており、それらを統一する主題が発見しにくいことによる。前者に主題性を認めれば、後者は源泉または祖型となった説話の残存で、作意の働いていない部分ということになり、後者に作意の中心があるとすれば、前者はかぐや姫の超越性を示し、物語に興味を添える従属的部分となるからである。

しかし、このような物語構造は『宇津保物語』にも認められる。『宇津保物語』は琴の秘曲にかかわる叙述その他、超自然的な要素は諸処にあるが、特に「俊蔭」の巻と「嵯の上」の巻とは浪漫的・超自然的な性格が強く、その中間にあて宮求婚譚や立太子争いなどの写實的な物語がはさまれている。そして、全二十巻を貫く主題は、四代にわたる琴の秘曲伝授の完成を主想とし、これを中心として、恋愛と政争に明け暮れる当代貴族社会の社会相を描

奥 津 春 雄

くことであつたと見られる。もっとも、執筆する時点から作者にこうした構想があつたのではなさそうで、途中に幾多の矛盾や方向のずれを含んではいるが、結果的にこのような主題でまとまったものようである。両者はこのように、空想的・浪漫的な枠組みの中に、写實的な求婚譚その他を包み込むという二重構造において似ているだけでなく、物語の進行につれて、作者の叙述・描写・人生觀照が深化發展して行くという点も共通である。また、『宇津保物語』の主題が最終的には、さまざまな人生を包み込んだ当代貴族社会の総価値批評であるとすれば、それは『源氏物語』の主題とも通いあうものとなってくる。そうとすれば、『竹取物語』の主題も、そうした初期物語史の流れの中で、また、中国小説成立史とも対比することによって、検討して見る必要があると思うのである。

二 求婚譚の特徴

そこで、まず難題求婚譚の部分であるが、これについては以前

に二、三の拙論を発表しているので、詳細はそれらに譲り、要点のみ摘記して多少の説明を加えることとする。

(一) 求婚五話の独立性

「仏の御石の鉢」の冒頭部は、その直前の、田中大秀の言う「つまどひ」の最後に、

御こ達・上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩

きそ、とやはのたまはぬ」と言ひて、倦んじて皆帰りぬ。

とあるのを受けたもので、難題のあまりの難しさに、百年の恋もさめた感じで一旦は帰ったものの、帰宅してみると恋心はやはり抑え難く、改めて難題に挑戦する勇気を奮い起こす様を述べたと見られる。従って「天竺にある物ももて来ぬ物かは」は、第一の難題の言葉为例として五人全部の決心を述べたものと理解すべきであり、そのうち石作の皇子は、天竺にただ一つの釈尊愛用の鉢だから、遙々行ってみても入手できるわけがないと判断して……という文脈なのである。

さらに、五人目の石上麻呂の段の終りの「これを聞きて、かぐや姫すこしあはれと思しけり」にしても、一応は死んでいった石上麻呂に対する同情であるが、物語の雰囲気としては、石作皇子はともかく、車持皇子は深山に跡を絶ち、阿部御主人は大金を失い、大伴御行は嵐の海で遭難し、そして石上麻呂は遂に死に至るという、求婚者達全部の成り行きに対するかぐや姫の同情の思いの表現と見ることができる。だからこそ、難題譚はここで区切りがついて、物語は帝とかぐや姫の話に移り、「さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを……」と語り出されることにな

るのである。こうしてみると、この難題求婚譚は、もと説話の自由区域であったかどうかはともかく、作者によって、きちんと冒頭と末尾を具えた、一定の主題を持つ一まとまりの部分として、たとえば『源氏物語』の「帚木三帖」のように、構想されたことがわかるのである。

(二) 難題すべてに見られる出典離れ

これは藤岡作太郎がすでに「竹取物語の全体を概括して論ずれば、前にいへるが如く、種々の出典はありながら、一も原書と同一のものなく、模擬の詠りを免れて、却って著者が取捨の才に長じたるを見る」と指摘していることであるが、この出典離れは確かに意図されたもので、これによって物語の中心興味が難題物のエキゾティシズムでなく、求婚者達の性格と行動に向かうようになっている。

(三) 五人五様の対照的な性格類型

同じく藤岡説で、対照性を原理として2話+1話+2話という構造を持っていることを言っているが、これは五種の性格を印象的に描き分けるための手法であったと思われる。高貴な身分の求婚者ばかりであるところにある種の作者の意図は感じられるし、失敗の経過の中に滑稽の要素が多いことも言うまでもないが、しかし、読者がすでに貴族の子女であるから（少なくとも桂の宮皇子内親王と源喜種が読んでいたことは確かである）、権門貴族の醜態暴露を主目的と見るよりは、貴族社会の人間の種々相をやや皮肉な目で描くところにテーマがあったと見る方が妥当である。諷刺的表現は勿論あるが、諷刺というよりはむしろ、人間性への興味が作意

となって『竹取物語』を成り立たせていると見るべきで、これはまた、六朝志怪から唐代伝奇への発展の主要な契機でもあったのである。

(四) 人間観察の深化

『竹取物語』は極めて説話的な語り口を持っている。この、素材・内容が写実的・現代的であるのに、語り口という表現の質の部分が説話的であるという点にこそ、『竹取物語』が説話の申し子である特徴が存する。求婚譚で言えば、少なくとも第一から第三までの話は、「蓬萊の玉の枝」に「この度はいかでか辞び申さむ」、「火鼠の裘」に「この度はかならずあはむ」とあって、順番に結末がついたことを示している。第四の「龍の首の珠」にはそうした順序表現はないが、第五の「燕の子安貝」は前述の通り、これで五人の求婚譚が全部終り、一区切りついた後、「さて」と言って帝とかぐや姫の話に移る。しかも、第五話は燕の季節の話だから、一年以内で終っており、五人中もっとも早く結末がついたはずなのである。つまり求婚五話は、時間的にではなく、身分の順序と内容の対比の都合によって配列されているわけで、従って、求婚譚は三年で終っているというように、物語中の時間を年立として整理する試みは、全く無益と言わなければならない。この、ちょうど直線の上を進むように、各挿話が順次継起したものとして語られる表現こそ、説話或いはメルヘンの特徴の一つであって、『竹取物語』が説話的な発想をもって語られていることを示している。

しかし、語り口そのものは説話的発想の残存であるにしても、

ここで注目されるのは、第一話から第五話へ進むにつれて、作者の人間観察や描写が次第に深まって行くことである。石作皇子の段が、機知的な歌の掛合の中で女心を捉えようとする行動を通して、その計算高さや厚かましさを語ろうとしているのに対して、「龍の首の珠」の段では、それぞれ利己的な大伴御行と家臣団の思いこみのずれを、常に並列・対照して描き出そうとしているし、「燕の子安貝」の段では、自主的な判断力がなく、周囲の意見にのみ動かされ、最後まで世間体と人の思惑に一喜一憂しつつ死んで行く小心な石上麻呂の姿を描いている。人に紙を持たせ、死の床から頭をもたげて、苦痛の中で返歌を書くというような描写的な文章が、「仏の御石の鉢」の段などにはなかったことを考え合せると、作者の描写の質の変わってきていることがわかる。各挿話の継起的発生という昔話の叙述法が、むしろ作者の観察の深化を助け、効果あらしめていると考えられるのである。

以上のように、求婚譚部分は、人間への興味に開眼した作者の人間の性格の種々相を描こうという作意によって語られており、その人間観察と描写は物語の進行につれて深まっているのである。

三 かぐや姫の描写

津田左右吉の説では、「恋に憂き身をやつす大宮人」を描くのが『竹取物語』の主題で、求婚譚以外の部分は読者の興味を引くための付加だとしているが、現在ではその冒頭・末尾の部分、特にかぐや姫の昇天に主題性を認めようとする見方が主流となっている。しかし注目すべきは、主題性につながるかぐや姫の描写は

帝の求婚以後の部分を中心とする事である。これはかぐや姫の描写の特徴であって、藤岡作太郎も前掲書の「竹取物語」の項の終りで、

かの赫耶姫が、もとは月界の僊なれど、この世にある間は、いつこまでも肉あり血ある人間にして、帝と和歌を唱和し、書と粟とを捧げ奉りて紀念とし、また翁夫婦にしきりに離別を悲みて、情緒纏綿たりしが如きは、棄てがたき可憐の情趣をこの傳奇體小説に與へしものなり。

と言っているように、かぐや姫を「肉あり血ある」人間として描写するのは、「御狩の行幸」以後なのである。

そこで、かぐや姫の描かれ方を竹取物語全体にわたって大観してみると、次のことがわかる。

第一は、かぐや姫の名の意味及びそのイメージにおいて、難題の場合と同様な出典離れが見られること、逆に言えば、かぐや姫は創作的人物だと言ふことである。「なよたけのかぐや姫」という名については、従来実に多くの典拠・解釈が提唱されている。「なよたけの」「なゆたけの」は『万葉集』に各一例しか用例のない枕詞だが、いずれも「とをよる」に続いて、若竹のようにしなやかな姿態を表す有意の枕詞である。また、「かぐや」は「かげ・かぎり・かがよふ」などの用例から「輝く」意と推定されるが、「かぐ」の語形で輝く意の用例はなく、「かがやく」の古形は「かかやく」と清音である。また「香」字を含む用例からは、藤井貞和の指摘するように、「かをる」意、あるいは「光輝」と「香氣」の両義を掛けた表現という可能性もなくはない。さらに、

「かぐやひめ」という名は、垂仁天皇の後「迦具夜比売命」が『記』に見え、その父は「大筒木垂根王」、叔父は「讃岐垂根王」、曾祖母は「竹野媛」である。「筒木」「垂根」が竹のことであり、「竹取物語」諸本の「さるき」「さかき」が「讃岐」の誤写ならば、竹にかかわる一族の名として迦具夜比売命の名が登場したのかもしれない。しかし、本文を虚心に読んできると、作中のかぐや姫のイメージは上記のどれとも、多少の差はあれ、異なっている。この名は、「木花之佐久夜毘賣命」と同じ語構成で、「若竹が内部からの光で緑の寶石のように輝くという、異常な光景の中で出現した神秘的な姫」の意であると解すべきで、作者はその伏線として、「もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば……」という念を押した表現をしていると思われるのである。⁽¹⁾

また、かぐや姫がもと羽衣説話の天女であるとすれば、そして、柳田説の言うように、冒頭・末尾の部分は自由区域でないとすれば、姫は羽衣を失うことによって人間界に結び付けられなければならないのに、竹中からの異常生誕であり、最後は羽衣を奪還して昇天するはずなのに、飛車に乗っての月宮帰還であって、羽衣は人間的感情を喪失させる道具となっている。結局、かぐや姫の名前やイメージに幾多の典拠はあるにしても、作中のかぐや姫は『竹取物語』という虚構の世界に合せて作者の創出した新しい人格と見るほかはないのである。

第二に注意されるのは、求婚者たちの場合と同じく、かぐや姫の性格や心理の描写も、物語の進行とともに深まって行くという

ことである。

まず、「かぐや姫生ひ立ち」では、神子誕生という神話的パターンで語られているからであろうが、人間としての存在感がほとんどない。

次の「つまどひ」及び難題求婚譚の部分のかぐや姫も、二、三の箇所を除いてほとんど無性格であるし、また、述べられた性格・心理に一貫性がない。たとえば「つまどひ」の段で、翁が結婚を勧めるのに対して、

よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、
後くやしき事もあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき
人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしと思。

という部分がある。これは、平安朝貴族女性の心理としてまことに自然であるが、全体のストーリーの上で言えば、こうした愛情の深さの確認、結婚後の夜離れへの恐れ of 心理は、心を許した帝との交情の場合を含めて、二度と話題にならない。その意味ではかぐや姫はここで、その場限りの言い訳をした事になるが、この後の難題提出にあたっての冷静な態度を見ると、翁が姫を説得して条件付き承諾を獲得したのではなく、むしろ姫が解決不能な難題提出の方へ話を誘導するための前提であったと見た方がよいのかも知れない。そう見ると、ここでは、人間である翁には窺い知り得ないかぐや姫の超越性がすでに動き始めている事になる。

求婚譚の中のかぐや姫も個性的には描かれず、その上前後矛盾しているところもある。まず、「蓬萊の玉の枝」の段で、車持皇子に追いつめられ、鍛冶匠らの登場で辛うじて切り抜ける場面で

は、都の人々が「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」と噂するのを聞いただけで、「我は皇子に負けぬべしと、胸うちつぶれて」思い、翁の言葉に対しても、「物も言はで、頬杖をつきて、いみじうなげかしげに思ひたり」という有様である。ところが、次の「火風の姿」の段では、かぐや姫は阿部御主人の持参した姿を見て「うるはしき皮なめり。わきてまことの皮ならむとも知らず」といいながら、動揺した様子も見せず、翁に「この皮衣は、火に焼かんに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人の言ふことにも負けぬ」、つまり、姿が燃えなければ阿部御主人の妻になろうと言って、姿を火にくべさせる。しかもこれが、結末を見通しているための冷静さでないことは、姿が燃えてしまったとき、「かぐや姫は「あなうれし」と、喜びてゐたり」と述べられているのでわかる。この前後矛盾した叙述は、難題求婚譚部分の主題が五人の求婚者の性格と行動にあって、かぐや姫にはなく、かぐや姫はストーリー展開上、その場その場で必要な反応を見せているに過ぎないことを示していると言える。

次の「御狩の行幸」の段に至って、前述の通り、かぐや姫の性格と行動の描写が始まる。作者は「かぐや姫生ひ立ち」「つまどひ」では竹取翁、難題求婚譚では五人の求婚者、「御狩の行幸」「天の羽衣」ではかぐや姫を主人公の立場に置いて叙述を進めているようである。しかしこの段では、かぐや姫はまだ超越者的性格が中心で、自信を持って帝と対決する姿が描かれる。この段の末尾では、帝の四季折々の御文に対して、「御返りさすがに憎からず聞え交し給ひて」とあって、やや人間味を感じさせるが、や

はり両者対等の立場での御文の交換であって、志怪的・神仙譚的な世界を感じさせるところがある。

「天の羽衣」の段では（勿論、昇天までの部分であるが、かぐや姫の性格・心理は求婚譚の部分で培われた写実的方法でいきいきと描かれる。三年目の春の初めからの物思いと嘆き、身分と事情の打ち明け話、八月十五日当日の昇天に至るまでの経過において、姫の心理と行動は実に人間的である。しかし、反面、かぐや姫の超越性は引き続き底流となって保たれている。かぐや姫の超越性が、はっきりと顕れるのは、なよ竹が緑に輝く異常な出現の場面、帝に捉えられて「きと影に」なる場面及び昇天の場面の三箇所だけであるが、前述した「つまどひ」の段の姫の言葉、「御狩の行幸」の段の大臣の房子や帝に対する応対、そしてこの「天の羽衣」の段のかぐや姫の言行などでも、何気ない言葉や叙述の陰に超越性がほの見える。かぐや姫の月を見ての嘆きを、周囲の者や翁らが心配するのに対して、「見れば、世間心ばそくあはれに侍る。なでふ物をか敷き侍るべき」「思ふこともなし。物なん心ばそくおぼゆる」と言って取り合わぬかぐや姫は、地上にいないが、すでに翁達と別の世界に住んでいる。八月十五日近い頃、はじめて身の上話をするときに、翁達の「心惑ひ」を心配して打ち明けずにいたと言うのも、結局翁たちと喜怒哀楽をとものにできないことの再確認に過ぎない。その身の上話の中でも、翁の許に出現した理由については、

昔の契ありけるによりなん、この世界にはまうで来りける。
いまは帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのも

との国より、迎へに人々まうで来んず。

と言ひ、また八月十五日の当日にも、

長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが、
悲しく侍る也。

と言っていて、「契」の内容は話していない。月の都の「王とおほしき人」の説明によれば、翁に対してはその作った功德への応報として、かぐや姫については月の都で犯した何らかの罪に対する贖罪として、地上へ流謫されたことになっている。しかし、それでは、姫と翁を結び付けるものは、月の都の王または司法機関の恣意ということになる。一方、「昔の契」という限りは、姫と翁が、前世においてともに同じ事件に関わったのでなければおかしい。従って、本文に従う限り、かぐや姫は複雑な実状を翁に話さずに「昔の契」という言い方でその場を取り繕い、翁は姫を失うことの衝撃で、「契」の内容の曖昧さに気付かなかったという作者の設定と理解するほかはない。

また月宮帰還についても、かぐや姫は「いまは帰るべきになりにければ」「長き契のなかりければ」と言っているから、前世において二人を結び付けていた宿縁の、遂げられずに終わった部分を完成させるために地上に降下したのであり、その滞在期間は、宿縁の内容と性質によって決まっていると言うことになる。しかし、月の都の王によれば、翁が功德の応報によって「そこの年頃、そこらの金給ひて、身をかへたるがごと」になったのは、すでに「かぐや姫生ひ立ち」の段であるから、今回ののは、かぐや姫の流謫の期間が終ったための呼び戻し、つまり、罪人としてのかぐや

姫の取扱いの一部だということになる。かぐや姫の滞在延長の願いが認められない点は同じであるが、内容は全く異なる。従って、ここでも、かぐや姫に、月の都の内情を竹取翁たちに話す気がなかった、或いは話すことができなかった、のは確かである。

このほか、かぐや姫は、常に冷静で気品があり、穏やかな物言いをするものとして描かれる。これは、事態の成り行きを見通している超越者のゆとりであると同時に、平安朝貴族の理想の態度でもあったはずである。六衛の司二千人が、竹取邸の家人とともに守りを固めたとき、かぐや姫は、月の都の人は弓矢でも射ることはできず、鍵をかけた戸も自然に開いてしまい、迎え戦おうとする勇猛心も萎えてしまうから、防衛は無益であることを説き、興奮していきまく翁に対しては、「親達の願をいさゝかだに仕まつらで、まからむ道も安くもあるまじき」と情をもって諭す。

そして、月の都の使いが到着したときは、姫の言葉通りの状況で、戦いは行われなかった……というような場面や、天人が遅いと心許ながるのを、「もの知らぬこと、なの給ひそ」と制して、「いみじく静かに」帝に御文を書く場面などにそれはよく現れている。

こうしてみると、かぐや姫は、異常で神秘的な竹中生誕に始まり、難題求婚譚までは物語の傍役としてその場その場にあった言動が描かれ、従って前後矛盾することもあるが、「御狩の行幸」でその超越性が明らかとなり、「天の羽衣」で超越性を保ちながら、人間らしい情愛と気品を併せ持つものとして描写されていることがわかる。つまり、作者が描き出そうとしたかぐや姫の理想性の内容は、天上の超越性と、光り輝く美貌と、人間的な情愛であ

ったと考えられる。その意味ではかぐや姫もまた、竹取翁や五人の求婚者とともに、作者の創造した新しい人物像といえることができる。

四 『竹取物語』の作意と主題

『竹取物語』は、このような天女の降下と昇天、竹取翁の側から言えば、その獲得と喪失の物語である。その意味ではまさに、「竹取の翁の物語」であって、かぐや姫の物語ではない。かぐや姫について、その人間的イメージが明らかにするのは「天の羽衣」の段においてであるし、その故郷「月の都」についても、そこに住む人々はみな美しく、不老不死の無憂の国と言うだけである。これだけでは浄土のイメージと変わらないが、月の都だと言うことから、読者は、嫦娥伝説や玄宗皇帝の月宮訪問譚を思い合せて、月宮の理想郷として読み取っているのである。しかし、嫦娥は夫の不死の薬を盗み、月へ逃れて蟾蜍となったのであるし、玄宗が道士羅公遠に連れられて行った月宮殿は内苑に仙女数百が舞を舞っていたが、「広寒清虚之府」であって、父母のいる家族的な面は見せていない。また、翁の「いささかなる功德」に対する応報として多くの黄金を与えたと言っているが、「功德」は明らかに仏教語である。その応報を、なぜ仏でなく、月の都の王が与えるのか。これらは勿論、例の出典離れであるが、そのことは、作者が、かぐや姫の故郷月の都についてはっきりとしたイメージを形成しようとしていないことを示している。作者の視線は、あくまで地上の人間世界に注がれているのであって、そこに出現したかぐ

や姫について語りはするものの、その帰って行く先の月の都について語ることはいらない。それは、蓬萊の玉の枝をめぐる車持皇子の策略と行動を詳細に語りながら、蓬萊そのものについては何も説明しないのと同じ態度である。

そのかぐや姫は、地上に出現して人間に何を与えたかと言うと、実は何も与えていない。『搜神記』⁽¹²⁾の董永に天帝が遣わした織女は、自ら機を織って董永の借金を弁済して昇天し、わが国の「伊香の小江」⁽¹³⁾伝説では伊香連の祖先となる四人の子を残し、「奈具の杜」⁽¹⁴⁾伝説では翁夫婦に万病を癒す酒を与えた。しかし、「竹取の翁」を「いきはひ猛の者」にした莫大な砂金はかぐや姫が授けたものかどうかはつきりしない。むしろ、月の都の王が与えたもののようでもある。以後、かぐや姫は自ら積極的に行動することはなく、帝を含めた貴顕達の求婚を避けて昇天しただけである。

これは伝承説話の世界にはありえないことで、これではかぐや姫は何のために地上に出現したのか不明ということになる。作者が、かぐや姫については流謫、流謫された先が竹取翁の家であるのは翁の功德に対する応報という、異種の二つの理由を設定したのはそのためと思われる。

その後、帝の永遠の思慕の思いを託す富士の噴煙の話が続いている。天女の獲得と喪失のうち、獲得の主体は翁であるが、喪失の主体は翁・姫と帝であり、帝の喪失感を描くことによって、物語はクライマックスに至る。これは物語の主題を担うものが、かぐや姫でないのは勿論、帝や翁などの個人でなく、それらを含めた「人間というもの」であることを示していると言えよう。

以上を総合してみると、『竹取物語』は竹取翁の出会った不思議な運命を語る物語という枠組みから発展して、天女の人間界における出現・滞在・消滅にともなうさまざまな事件を述べ、それを通して、永遠の憧憬と努力と蹉跌を繰り返す人間の運命を描くことを主題とすると考えられるのである。

この結論は、これまでに提唱された諸先学の主題論とさして隔たるものではない。ただ以下に述べる二つの点を特に確認しておきたいのである。

その一つは、地上の世界についての価値観の問題である。『竹取物語』を「厭離穢土、欣求淨土」、或いは理想と現実の乖離を描いた、現世否定の理想小説と見る考え方があったが、そのように割り切ることはできない。藤井貞和が、

かぐや姫は矛盾的な両界の中間点に、むしろ人間の感情の世界にたちいるようにしていることが観察される。……そのような人間存在を暖かく見守る眼の確かさにおいて先駆的であった。⁽¹⁵⁾

と指摘している通りで、作者は月の都の世界に対して、明らかに人間世界の優位を主張している。八月十五日の当日、興奮する翁を有める言葉の中で、かぐや姫は、

かの都の人は、いとけうらに、老をせずなん。思ふ事もなく侍る也。さる所へ罷らむずるも、いみじくも侍らず。

と言っている。「そうした所へ帰って行くのも、嬉しくもありません」というのだから、その裏では、人々がこの上なく高貴に美しく、不老長生で、憂いのない月の都を理想の楽土（翁たち人間に

とつても)と考えていることがわかる。ところが、昇天の場面では、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁をいとほしく、かなしと思しつる事も失せぬ。此衣着つる人は、物思ひなく成りにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬとあつて、作者は、翁をいとおしく、愛しく思う気持ちの失せたのが、「物思ひ」なくなることであつたという文脈で書いている。恩愛の情を喪失して、冷然として帰って行くかぐや姫の故郷は、理想郷として憧れ、欣求すべき所かどうか疑わしい。考えてみれば、憂いのない世界というのは、比較の対象がないわけだから、喜びもまたないことになる。

しかし、この後、帝の永遠の思慕が語られるところを見ると、作者がこの昇天の場面に死のイメージを託していると言ふ見解は妥当なものと思われる。従つて、最後の富士噴煙の由来譚には、永遠なるものに憧れずにはいられない人間の本性と、死者への思慕・哀惜の情が、懸詞のように重ね合わされていると見るべきであらう。

第二は人間への興味が、この物語を支えていることである。風景景次郎が魯迅の『中国小説史略』を参考にして論じたように、人間性への興味が生まれ、説話の話型や素材を用いて、虚構の方法によつて物語化されたところに、小説の発生があると考えられる。唐代、特に中唐に盛行した伝奇類は、まさにそうしたもので、たとえば『任氏伝』は、狐妖任氏の妖しく不運な一生を描いているが、その主題は、十分には理解されなかつた女の純愛の、悲劇的な美しさを描くことであつたとされているし、『枕中記』は、

『幽明録』の楊林の話を枠組みとしながら、世俗の権勢・富貴はかないもので、人生の真の幸福は精神の自由にあることを語つたものと言われている。こうした中国小説成立史と対比し、上述したような諸条件を思い合せてみると、『竹取物語』の作者もまた、こうした人間性への興味に動かされて物語を構成したことがわかる。永遠の美に対する憧憬と空しい努力と蹉跎という点から見れば、帝も五人の貴公子も同じことである。これに、翁とかぐや姫を加えて七人の主要人物が、それぞれの立場と運命の中で見せる性格と行動の関わりは、作者にとつて限りなく興味あるものであつたであらう。常に憧れを持たずにはいられず、しかも常に空しい努力に終る、その両方がともに人生の味わいであり、生きがいでもあることを作者は知つていたのであらう。そのような人間の種々相を描くところに『竹取物語』作者の作意があつたと思われるのである。

注(1) 拙稿「竹取物語」求婚譚の構造と主題」『日本文学』一九九〇年五月号

(2) 以下、「竹取物語」の章段は「竹取翁物語解」の説に従う。

(3) 以下、「竹取物語」本文の引用は阪倉篤義校訂『竹取物語』(岩波文庫)による。

(4) 求婚者の呼称は諸本によってさまざまなので、便宜上『竹取翁物語解』の呼称による。

(5) 藤岡作太郎『国文学全史平安朝篇』明治三十八年十月 東京開成館刊

(6) 注(1)

(7) 注(1)

(8) 「文学に現はれたる國民思想の研究」第一巻 岩波書店 昭和二十六年七月刊

(9) 注(5) 第一期第八章竹取物語

(10) 藤井貞和「物語文学成立史」東京大学出版会 一九八七年十二月刊

(11) 拙稿「中秋明月と『竹取物語』」『早稻田実業学校研究紀要』4号 昭和四十四年十二月刊

(12) 二十卷本「搜神記」千宝撰 中華書局 一九七九年九月刊

(13) 「近江国風土記逸文」日本古典文学大系「風土記」秋本吉郎校注 岩波書店 昭和三十三年四月刊

(14) 「丹後国風土記逸文」注(13)に同じ

(15) 「日本文学全史 中古」第三章2竹取物語(藤井貞和) 市古貞次 他編 学燈社 昭和五十三年五月刊

(16) 「風景景次郎全集」第三卷所収の諸論文。「物語の本質」「古代物語の成立」「物語文学の発生」など。昭和二十五年から昭和三十三年頃までに発表された。

新刊紹介

樋口芳麻呂・鷹尾純・久保朝孝・岩下紀之著

『王朝の女流作家たち』

本書は、平安・鎌倉期の代表的女流十三人を論じた作家論集である。

冒頭にはまず「総説」が配され、王朝時代の女性の文業が俯瞰される。紙数としては短い、中に「王朝女流作家著作一覧

表」を含むなど、密度は濃い。論点的確に整理されている。続く本論で取り上げられた十三人は、平安朝から小野小町・伊勢・道綱母・和泉式部・清少納言・紫式部・赤染衛門・孝標女の八人、鎌倉から式子内親王・建礼門院右京大夫・俊成女・阿仏尼・後深草院二条の五人。作品の読解と伝記的事実の考証を織り合わせ、作者の全体像を描出するスタイルをとっており、引用文には適宜、口語訳が付されている。一般読

者が王朝女流文学を知るために、恰好の体裁を具えた論といえるが、その内容的水準は高い。巻末には参考文献リストと引用和歌上句索引が配備され、本書の価値をいっそう高めている。

なお、著者のうち、鷹尾純・久保朝孝・岩下紀之の三氏が国文学会会員である。

(平1・6 世界思想社 四六判 二八五頁 二二〇〇円) (助川幸逸郎)